

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
領域開拓プログラム（研究テーマ設定型研究テーマ）
評価用研究成果報告書

課題		行動・認知・神経科学の方法を用いた、人文学・社会科学の新たな展開		
研究テーマ名		「社会価値」に関する規範的・倫理的判断のメカニズムとその認知・神経科学的基盤の解明		
研究代表者	所属機関	東京大学		
	部局	大学院人文社会系研究科		
	役職	教授	氏名	亀田達也
委託研究費		単位：千円		
平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	
5,000	10,000	10,000	5,000	

1. 研究の概要

研究目的、研究内容、成果や波及効果等、実施した研究の概要について、簡潔に記述してください。

研究目的 富や権利の配分を含む「社会のあり方」に関する価値対立は、“Occupy the Wall Street”運動とその世界的拡大に示されるように、喫緊の政治的・社会的課題になっている。本研究は、「社会のあり方」に関する人間の価値判断がどのような行動・認知・神経科学的メカニズムを持つのかについて、人文学・社会科学において蓄積されてきた規範的理論の展開との対応関係を視野に入れながら、行動・認知・神経科学の先端的研究手法を用いて検討する。そして、そこから得られた実証的な知見が、「社会価値」に関する人文学・社会科学の規範的モデルに対してどのような含意を持つのかを考究することで、人間の認知・行動に関する記述的（「～である」）理論と規範的（「～べき」）理論の有機的な接合に向けての道筋をつけることを目的とする。

研究方法 社会哲学・倫理学などの人文学領域、経済学・法学・政治学・社会学を含む社会科学領域において最も中核的な問題の1つである「社会的価値の形成と維持・適用」を支える基礎メカニズムを、一方で行為の主体性（「実践的エージェンシー」）を軸とする規範的価値の論理や心理モデルを開拓しつつ、他方で近年の脳科学における「価値の計算論モデル」を取り入れ、規範と実証の有機的な接合において明らかにした。規範理論面では、現代正義論の端緒となった John Rawls の正義論の発展状況の整理に加えて、主体的判断における理性と感情の相補的關係について検討を行った。また、実証面では、計算論的モデリング、MRI を用いた脳画像(機能・構造画像)計測、eye-tracker を用いた視線計測、末梢自律神経反応(BVP, SCR)の計測、内分泌反応計測などの手法を用いたラボ実験を中心に、①価値形成の基礎プロセスの検討、②高次の社会価値の働きに関する「分配の正義」を範例とする分析を行なった。

成果と波及効果 文理の壁を超えた高い世界的インパクトをもつ研究成果を生み出すことを目指しつつ、人間・社会・自然の全体的理解に向けた諸学の密接な連携を視野に入れた共同研究を推進した。本研究計画の代表的な成果として、John Rawls の正義論を支える「無知のヴェール」や Maximin 原理などの規範理論的な概念群が、人々の実際の分配判断においても重要な役割を果たすことを、一連の行動・認知・脳科学実験により明らかにした研究が挙げられる。この成果は、Rawls の規範的理論に世界で初めて脳科学的・行動科学的な基礎を与えた研究として、米国科学アカデミー紀要 (PNAS) にコメンタリー付きの論文として公刊され、国内外で大きな反響を呼んだ。またこの知見と照応するかたちで、法哲学・倫理学における規範的敷衍として、分配の正義における平等観念の機能の基底的な意義の再検討を行ない、平等主義的リベラリズムの重要性についての再考を行った。本研究プロジェクトの成果の一端を、平成 29 年 3 月に『モラルの起源—実験社会科学からの問い』（岩波新書）として公刊し、一般読者層への社会還元を試みた。さらに、行動経済学、神経経済学、心理学、社会心理学、哲学、倫理学、社会脳科学、動物行動学、内分泌学などの多岐にわたるシンポジウム・セミナーで本研究の成果を広く共有・討議し、文理の壁を超えた領域交叉的な先端コミュニティを形成することに成功した。